



特集 しま 国境の風を感じて —30回目の国境マラソン—

初夏の風が、ランナーたちの頬を掠めて吹き抜けていく。6月28日「第30回 国境マラソンIN対馬」が開催されました。

1996年、地域を元気にしようと始まったこの大会。幾多の波を乗り越え、島内外から集まる参加者と島民の手で大切に育まれてきた道は、気づけば30年という長い歴史のバトンをつないできました。

日本の渚百選に輝く三宇田浜の息をのむような美しさと、ランナーを容赦なく阻む「日本一タフ」な激坂。

この特別な「国境（しま）の風」のなかで、限界に挑み続けたランナーたちの情熱。そして、30年間変わらぬ温かさで迎え、支え続けてきたボランティアスタッフ。そのふたつが重なり合ったとき、今年もまた新しいドラマが生まれました。

当日の中継映像は
こちらから！





上対馬町の商店街活性化のイベントとしてスタート



平成8年7月、第1回となる国境マラソンが開催されました。上対馬の商店街を盛り上げる手段として、当時の商工会が中心となって生まれたイベントでした。

走り終わった後に、美しい対馬の海で泳いでもらえたらより楽しめるのではないかと、秋から冬にかけてが競技シーズンとなるマラソンを7月に開催したことで、対馬だけでなく全国からも注目を集めることとなります。初回大会には韓国からの参加者23人を含む、826人のランナーが島内外から集まり大盛況の内に終わりました。

『国際』!?『国境』! 大会名の行方

準備を進める当初、外国の人にも参加してもらおうと、大会名を「国際マラソン」にしようというアイデアがだされましたが、競技的に大規模な大会と混同されるおそれがあることから、現在も続く国境マラソンと名付けられました。



記念すべき第1回大会のポスター



国内屈指の過酷な大会に、リピーターも続出。対馬を代表するイベントに成長



スタート、ゴールの位置は第1回から変わらない

起伏の激しいコースに加え、暑い時期に開催される大会ということで、国内でも屈指の過酷なマラソン大会は、第1回の盛り上がりを受け、旧上対馬町全体のイベントとして続くこととなりました。大会運営には、地域の人たちがボランティアで参加、会場の準備から運営、選手のケアまで、多くの人たちがこの大会に関わるようになります。過酷なコースと地域の人たちの温かいおもてなしに、訪れたランナーは「来年もまた参加したい!」とリピーターとなり、規模は年々大きくなります。第5回大会からは1,000人を超すようになり、対馬島内を代表するイベントの一つと数えられるようになりました。

1年、1年と大会を開催し、気づけば30回に

眞崎 龍介 前実行委員長

商工会主催から実行委員会主催になった第2回から第20回まで実行委員長として大会に関わりました。当初、国境マラソンは一度きりで終わる流れだったのですが、地域の若い人たちを中心に、国境マラソンで地域を盛り上げたいという機運が高まり、その熱意に押されて実行委員長になったことを憶えています。その熱意は私だけでなく、地域の人たちにも伝わり、年齢や職業などを超え、ボランティアで大会を支えてくれています。年々参加者も増えて規模が大きくなると、上対馬だけでなく上県や峰に住む人たちも協力を申し出てくれ、対馬市になってからは全島からボランティアとして駆けつけてくれました。30回も続くと、親から子、そして孫の代まで、その心が受け継がれていると感じています。

私自身も、大会のPRに島外へ出向き、参加を呼

びかけました。国境マラソンという名前に合わせて、海外、特に韓国の人たちへの参加の呼びかけのため、韓国国内のマラソン大会と提携した時に、幾度も盃をかわして言葉の壁を乗り越えたことは良い思い出です。

今回30回を迎えますが、長く続けようという気持ちはなく、1回1回の大会をやり続けて30回になったという気持ちのほうが大きいです。地域を代表するイベントとして定着してくれてよかったなという思いです。



第1回大会の記録写真より（右から2人目）



走る者と支える者が紡いだ、国境の熱い1日

■ランナー



「優勝を目標にトレーニングに励みました!」

小田 隆展さん（ハーフ一般男子39歳以下優勝）

これまで10回ほど出場し、初めて優勝できて嬉しいです。優勝を目標に、月に500km以上走り込みを重ねトレーニングしてきました。アップダウンが激しいコースですが、その中で広がる美しい景色を楽しみながら走ることができる大会です。今後はフルマラソンやウルトラマラソンなど、島外の大会でも良い結果が残せるように頑張っています。

「初出場で初優勝、今度はゆっくり観光に!」

宮坂 佑希さん（ハーフ一般女子39歳以下優勝）

今年初めて吉岐から参加しました。対馬に来たことも初めてで、山に囲まれた感じが、故郷の長野に似ていて安心感がありました。想像以上にアップダウンが激しいコースだったのですが、ランナーや沿道の方が声をかけて励ましてくれ、頑張ることができました!



「走ること対馬を全国にPRしたい」

中山 貴子さん（7.1km女子39歳以下優勝）

アップダウンの激しいコースでトレーニングにもなるし、何より厳しいコースだからこそ、止まりそうになる自分との戦いを通して、自らを高めてくれる大会だと思います。島内の陸上チームに所属し、島外の大会にも参加しているので、走ること対馬を全国にPRできればと思っています。

■ボランティア 大会の自慢である、頼もしい裏方たちの声



「写真を通して大会を楽しんでもらいたい」

江藤 幸治さん（写遊国境代表）

上対馬の写真クラブ「写遊国境」が、第1回目から公式記録写真を撮影しています。雨や暑さなど、カメラや写真にとって過酷な現場ではありますが、選手が懸命に走る姿に、自然とシャッターを切りたくなります。これまで会場で昨年の写真だけを掲示し、希望者に持って帰ってもらっていましたが、過去の写真も展示するようにしたところ、十数年前の自分に出会えたと、選手の方に喜んでいただいています。



「学校を挙げて応援しています!」

神宮 愛香里さん（上対馬高校3年）

今年から上対馬高校では、学校行事としてスタッフに参加することとなりました。手荷物係を担当しましたが、お手伝いすることで、ランナーや観客だけでなく、その人たちを支えるスタッフの存在がこの大会を支えているのだと改めて感じました。

節目となる今大会、あの過酷で美しいコースを駆け抜けたランナーの胸には、どのような風が吹き抜けたのでしょうか。そして、舞台裏を支えたスタッフたちは、どのような思いで彼らを見守っていたのでしょうか。メモリアルイヤーの熱気が冷めやらぬ会場から、それぞれの視点で語る「30回目の物語」をお届けします。

「みんなでイベントを盛り上げたい!」

齋藤 大輔さん（上対馬高校2年）

ボランティアとして、今回で4回目の参加です。国内外からたくさんの方が来てくれ、このマラソンをきっかけとして様々な交流が生まれています。とんちゃんを焼くスタッフとして、熱い焼き台を前にとっても大変ですが、若い高校生が弱音を吐くわけにはいかないと頑張っています。



■ ゲストランナー



「アットホームな大会に癒されました!」

高橋 尚子さん（シドニー五輪金メダリスト・2回目の来島）

みなさんの笑顔がすごく光った良い大会だったと思います。沿道にもたくさんの方の応援の市民の方が出てくださって、選手、観客、ボランティアスタッフが一つになっている大会だなと感じました。空と海の青さと、山の緑が鮮やかでとても癒される中走ることができ、走った後は海に入ってアイシングもできるという、夏開催ならではの良さもある大会です!

「猫ひろしからツシマヤマネコひろしへ!」

猫 ひろしさん（リオ五輪カンボジア代表・3回目の来島）

3回連続で参加させていただき、走りながら、前に走った記憶が蘇り、このコースの虜になっています。今回は“ツシマヤマネコひろし”として走らせていただきたいと思います! 終わった後は、海に入って“ウミネコひろし?”になりたいと思います! とても気持ちの良い大会で、7.1kmから出場できるので、多くの方に出場してほしいと思います!



「共通言語はマラソン。国を超えて、一つになる大会」

三津家 貴也さん（ランニングインフルエンサー）

スタート直後の坂もあり、凄くきついコースではあったのですが、かえって自分のペースにとらわれないことで、対馬の景色を、五感を使って楽しむことができました。韓国の参加者とも「ファイティン!」と声を掛け合って走ることができ、国境マラソンを通して様々な人と交流する楽しさも感じる事ができた、素敵な大会だと感じました。

今村 純一 実行委員長

30回の節目の大会が、無事に開催できてよかったです。20回大会から実行委員長をやらせていただき、私にとっても節目となる大会が終わってホッとしています。これまでの振り返り、地域の子供たちに、選手としてではなくボランティアスタッフとして関わってもらいようになり、より地域と一体となった大会に成長したと感じています。コロナ禍による2回の中止で、大会の火が消えそうになったこともありました。事務局をはじめスタッフや地域の人たちがみんなで開催に向け動いてくれたのも、忘れられない思いです。これからもバージョンアップしながら、国境マラソンが続いていくことを願っています。

